
Midnight's Bell

誘風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M i d n i g h t ' s B e l l

【Nコード】

N 6 7 4 4 Z

【作者名】

誘凧

【あらすじ】

平和な天津市で起きた惨劇。

主人公のトウマはあることがきっかけで力を手に入れる。次々と、起こる惨劇。

トウマは、自分の意志とは関係なく、己の運命に翻弄され闇に身を投じていくことになる。

ep.1：目覚め（前書き）

この物語に登場する人物、事象等はすべてフィクションです。
一部暴力的な表現があるので、苦手な方は見ないようにしてください。

e p . 1 : 目覚め

カーン、カーン・・・

午前2時。丑三つ時に鳴り響く鐘。

そのとき、高台の上の一つの影が合った。

「ようやく、始まったようだ・・・。」

その瞬間、木々が激しく揺れる。

時折、獣のような声が聞こえる・・・。

一方、物語の主人公である、トウマは深い眠りに就いていた。トウマは、私立碧桜学園に通う高校生だ。

翌朝、トウマは普段通り身支度を済ませ、学園に向かった。

校門の前には人だかりができていた。

その中には泣き崩れているものもいた。

視線が集まっている方向を見た。

「っ!!！」

無残な姿で、一人の女子生徒が殺されていた・・・。

(あれは、確か隣のクラスの・・・。)

泣いている生徒は、その彼氏。

その後すぐに、休校ということになった。

それから特にすることもないので、町をぶらぶらしていると

横目にフードを被った男がビルの上に建っているのを見た。

そして振りかえり見てみると、誰もいない。

「なんだ、気のせいか。」

しばらくゲーセンで時間を潰してから帰宅することにした。

ゲーセンには、自分と同じように暇を潰している生徒が何人かいた。

「よぉ。お前もか。」

声が出たほうを見ると、クラスメイトの芦屋がいた。

「やることもないからな。」
とぶつきらばうに答えた。
「まあ、とりあえず格ゲーでもしようぜ。」
それにうなずくと、各々座った。
しばらくして、家に帰る途中再び、あのフードの男を見た。
男は、教会のほうを見ていた。
そして口を動かしていた。
気にしてもしようがないので、さっさと帰ることにした。

その夜、なかなか寝付けず、コンビニに行くことにした。
家を出ると、路地から悲鳴のようなものが聞こえてきた。
恐る恐る近づいていく。

そうして路地の入口。

「っ！！！」

下を見ると夥しい血の跡があった。

その血の跡を目で追う。

そして……

「キシヤアアアっ！！！」

慌てて視線を正面に戻すと。

遅かった……。

「ぐっ！！！」

相手を視認する間もなく、何かが身体を突き抜けた。

バタツ……

力なく倒れた。

「め……よ。わ……よ。」

薄れ良く意識の中で声が響いてきた。

「ち……を、……めよ。」

意識を声に向ける。

「目覚めよ。我が眷族よ。力を、求めよ。」

「カ・・・？」

目の前が黒く染まったと思うと、光の玉が現れる。

トウマは、それに手を伸ばす。

光の玉は、飛び散り、トウマの中に入ってきた。

「っ！！！！」

手に重みを感じて、見てみると、大振りの刀を持っていた。

「なんだ、これは。」

「キシヤアアアアっ！！」

再び、黒い影が飛びかかってきた。

トウマは、刀を振り下ろした。

すると、黒い影は光となって刀に吸い込まれていく。

そこで、トウマの意識は途絶えた。

e p . 1 : 目覚め (後書き)

コメントがあれば、続きを書いていきます。

なんでも結構ですので、読まれた場合は評価等お願い申し上げます。

日常（前書き）

前話とは、違う人物の話になります。

日常

真夜中の鐘が鳴り響く。

同市某所。

事件が起きていた。

その日は朝から、妙な胸騒ぎがしていた。

しかし、心当たりもなく気にしないことにしていた。

「はぁ……。」

サナ……前話と同市内にある女子高に通っている。

「サナ、どうしたの？」

一緒に登校している友達が訊ねてきた。

「なんか今日は調子が悪くてね。」

「拾い食いとかしちゃだめよ？」

「そのせいかなぁ……。」

「え、ほんとに？んなわけないか。」

「なんてねっ。冗談よ。」

「ふっん。ならいいんだけど、ほんとに辛くなったら保健室とか行きなよ？」

「うん、ありがと。でもほんと何でもないから気にしないで。」

努めて明るい口調で言った。

「わかった。」

渋々納得したようだ。

昼休みになり、仲のいい友達数人と屋上に向かう。

「う、うっん！いい天気！」

サナは手を上に上げながらいった。

「そうだねえ。」

と、その言葉に他の面々も反応した。

「それじゃ、ご飯食べようか！」

と、リーダー的な存在の子がいうと、各々弁当を広げていく。

「あ、それおいしそう。これと交換してくれない？」

「うん、いいよあ。」

「ありがとつ。うん、やっぱり美味しいわねえ。お嫁さんにしたいぐらい！」

「お友達から。」

みんなが、そのやりとりを見て笑った。

サナも、なるべく明るく笑っていた。

昼休み中、他愛もないそんな話ばかりをしてみると

キンコンカンコーンと予鈴が鳴った。

「あ、もう終わりかあ。」

「あと2時間ぐらい欲しいよね。」

「ほんと。」

とみんながそれに笑いながら答えた。

午後の授業を受け、放課後になった。

サナは、部活には所属しておらず、特にすることもないので帰るところにした。

その帰り道、ビルの上に立つ影があった。

なぜか妙に気になった。

立ち止まって、見上げた。

何か呟いているようだった。

「なんだろ。ん〜、考えても仕方ないか。早く帰ろつ。」

そう呟いて、家に向かう。

家に帰ってから、特にすることもなかったので予習をすることにした。

それから2時間後、母親が帰宅し、夕ご飯を食べた。父親は単身赴任で、一月に一度帰ってくる程度だ。食事を終え、部屋に戻った。

それからお気に入りのポップスを聞いていた。23時過ぎ。

「そろそろお風呂入って寝ようかな。」
誰にともなくそう言った。

風呂から上がり、髪を乾かし、櫛で整えベッドに入った。そして目を閉じ徐々に意識が薄れていく……。

……カーン。

「鐘？」

音で、再び意識が浮上してくる。

カーテンを開け窓の外を見た。

「ん〜、この辺で鐘があるのってあそこだけだけど……気のせいかな？」

教会は、サナの家からは離れていた。

鐘の音が聞こえるはずのないくらい……。

「気にしてもしょうがないし寝よう。」

そして、意識が薄れていく……。

日常（後書き）

次回もサナのお話です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6744z/>

Midnight's Bell

2011年12月29日01時53分発行